太宰府の文学

～資料室だより㊼～

～中世安楽寺と連歌のかかわり～

連歌は和歌から派生して中世に広く流行しました。複数の参加者が、五七五の長句と七七の短句を交互に連鎖して前の句に付け合せていき、百句（挙句という）に至る百韻を基本形式とします。

連歌を大きく興隆させたのは、南北朝期の連歌師救済（きゅうぜい・ぐさい）でした。鎌倉時代末、救済は菅原道真を祀る京都の北野社で、毎年千句連歌を興行します。また、道真の廟所である安楽寺（太宰府天満宮）に参詣し、「紅を忘れぬ梅の紅葉かな」（菟玖波集）などの句を詠んでいます。その後、道真＝天神を連歌の神と仰ぐ心情が生まれ、連歌の会席には天神の名号がかけられるようになります。

応安４（１３７１）年に今川了俊が九州に下向したことは、大宰府における連歌の展開に大いに影響を及ぼしました。了俊は室町幕府の九州統治機関である九州探題として九州入りし、征西府（九州の南朝勢力）を追い落として大宰府を制圧したり、九州探題に反抗的であった少弐冬資を殺害したりするなど、武人として大きな功績をあげますが、彼は文人としても多くの足跡を残しました。

たとえば、京都にいる連歌の師匠二条良基との間で問答体の連歌論書を著したり（下草）、在地の連歌好士との間で点者（判定者）の役割を果たしたりしています。また、同じく了俊の連歌の師匠である周阿は、晩年九州の了俊を訪ね、安楽寺で行われた連歌会で「晴れにけり花のなき名の梅の雨」（九州問答）という句を詠んでいます。

特に注目すべきは永徳２（１３８２）年正月に了俊一座によって興行された千句連歌の安楽寺への奉納です。千句のうち第５百韻の懐紙が残っており、今川氏の子弟・一門、家臣、安楽寺社家、時衆などとともに了俊は連歌を詠作しています。このなかで、了俊は「今日いくか我此花の御かき守」という発句（百韻の冒頭の句）を詠んでいますが、「此花」は梅を指し、梅に象徴される大宰府を九州探題として守護しようとする彼の抱負が詠みこまれているとされています。

こうした安楽寺と連歌の関わりをもととして、室町戦国時代には多くの連歌師が安楽寺に参詣するようになるのです。

市史資料室　朱雀　信城